

執筆・作成・協力者

藤森麻衣子	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
白井 由紀	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
嶋池 直邦	(独立行政法人国立病院機構九州がんセンター血液内科)
山田 祐	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
伊東 美和	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
内富 庸介	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
高橋 通規	(独立行政法人国立病院機構仙台医療センター総合診療科、緩和ケアチーム)
藤阪 保仁	(大阪医科大学附属病院呼吸器内科)
二宮ひとみ	(大阪医科大学応用医学講座神経精神医学教室)
佐藤 愛子	(独立行政法人国立病院機構仙台医療センター内科)
久保田 馨	(国立がんセンター東病院呼吸器科)
大島 彰	(独立行政法人国立病院機構九州がんセンターサイコオンコロジー科)
大庭 章	(静岡県立静岡がんセンター精神科)
岸澤 進	(市立砺波総合病院(富山県砺波市) 精神科兼緩和ケア科)
野崎 善成	(市立砺波総合病院(富山県砺波市) 外科兼緩和ケア科)
勝俣 範之	(国立がんセンター中央病院乳腺グループ)
田中 桂子	(静岡県立静岡がんセンター緩和医療科)
秋月 伸哉	(国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
浅井真理子	(筑波大学大学院人間総合科学研究科)
梅澤 志乃	(国立がんセンター中央病院看護部)

厚生労働省第 3 次対がん総合戦略事業第 6 分野「QOL 向上のための各種患者支援プログラムの開発研究」
平成 18 年度研究報告書 コミュニケーション・スキル・トレーニング テキスト 1.0 版 (2006)

編集	国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部
責任編集者	藤森麻衣子 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部) 内富 庸介 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
執筆・作成者	藤森麻衣子 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部) 大庭 章 (静岡県立静岡がんセンター精神腫瘍科) 浅井真理子 (筑波大学大学院人間総合科学研究科) 久保田 馨 (国立がんセンター東病院呼吸器科) 秋月 伸哉 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部) 勝俣 範之 (国立がんセンター中央病院内科) 内富 庸介 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部)
協力者	明智 龍男 (名古屋市立大学大学院医学研究科精神・認知・行動医学) 稲垣 正俊 (国立がんセンター東病院臨床開発センター精神腫瘍学開発部) 梅澤 志乃 (国立がんセンター中央病院看護部) 岡村 優子 (癌研有明病院腫瘍精神科) 木澤 義之 (筑波大学人間総合科学研究科) 木下 寛也 (国立がんセンター東病院緩和医療科) 栗原 幸江 (静岡県立静岡がんセンター緩和医療科) 小池真規子 (目白大学人間社会学部心理カウンセリング学科) 小早川 誠 (広島大学病院緩和ケアチーム) 嶋本 正弥 (国立がんセンター中央病院精神科) 清水 研 (国立がんセンター中央病院精神科) 鈴木志麻子 (北里大学東病院精神科) 田中 桂子 (静岡県立静岡がんセンター緩和医療科) 谷口 幸司 (たにぐち皮膚科アレルギー科) 松岡 豊 (国立精神・神経センター精神保健研究所成人精神保健部) 村上 好恵 (聖路加看護学大学院看護学) 森田 達也 (聖隷三方原病院緩和対症治療科) 吉川 栄省 (静岡県立静岡がんセンター精神腫瘍科) Baile FW (The University of Texas, M.D. Anderson Cancer Center) Kissane DW (Memorial Sloan-Kettering Cancer Center) Parker PA (The University of Texas, M.D. Anderson Cancer Center)

— 目 次 —

はじめに	2
コミュニケーション・スキル・トレーニング (CST) の目標	3
Part I 講義	5
1. がん医療における患者—医師間のコミュニケーション	7
2. がん医療における悪い知らせを伝える際の コミュニケーションに関する知見	11
3. コミュニケーション・スキル・トレーニングの目的	20
4. SHARE プロトコル	21
Part II グループ・ワーク	29
1. 他己紹介	31
2. ビデオ	32
Part III ロール・プレイ	43
1. ロール・プレイについて	45
2. ロール・プレイ用シナリオ	48
3. 模擬患者背景	74
付録	79
返答に困る質問への対応例	81
SHARE PROTOCOL	82

はじめに

現在、わが国のがん罹患は50万人を超え、がん死亡は30万人に達し、三人に一人はがんで亡くなる時代となりました。がんの治療が進歩したとはいえ、まだなお、生命を脅かす病の代表であり、二人に一人の方の治療には限界があります。進行がん、再発、抗がん治療の中止などの「悪い知らせ」を伝えられることは、患者、家族にとって衝撃的な出来事であり、その後の日常生活やストレス、場合によっては治療選択を誤らせるほど影響が大きいことが知られています。また同時に「悪い知らせ」を伝える側の医療者にとっても苦痛を伴うものとなっています。

医学の進歩や社会の情報化に伴い、医師が患者に悪い知らせを伝えることを避けて通ることができない時代となりました。さらに患者のニーズが多様化していることから、今後は「何を伝えるか」だけでなく「どのように伝えるか」という視点が重要性を増す時代となることが予測されます。海外では「悪い知らせ」を伝える際の患者—医師間のコミュニケーション・プログラムが開発され、医療者の教育現場で使用されています。一方わが国における患者—医師間のコミュニケーション研究は、近年着手されたばかりであり、今後の研究成果の蓄積を必要としています。

平成16年に始まった厚生労働省の『第3次対がん総合戦略事業』はわが国のがん研究の大きな柱の一つとして、さまざまな研究をサポートしています。国立がんセンターで行われた、「がん医療における患者—医師間のコミュニケーションに関する研究」も、この『第3次対がん総合戦略事業』の中の「QOL向上のための各種患者支援プログラムの開発研究」の一環として行われ、この研究成果から本プログラムは作成されました。

がんを抱える患者、その家族の後押しをうけ、平成19年4月1日よりがん対策基本法が施行され、その基本理念として、「がん患者の置かれている状況に応じ、本人の意向を十分尊重してがんの治療方法等が選択されるようがん医療を提供する体制の整備がなされること」が掲げられています。この理念を実践するために、がん対策推進基本計画に、「がん医療における告知等の際には、がん患者に対する特段の配慮が必要であることから、医師のコミュニケーション技術の向上に努める。」という施策が盛り込まれました。

それを受けて、厚生労働省の委託事業として医療研修推進財団が主催し、日本サイコoncology学会協力のもと、コミュニケーション技術研修会が行われることとなりました。本プログラムは、あらゆるケースを網羅的に取り上げることはできませんが、本プログラムで学習されたスキルを礎として、がん医療における患者—医師間のコミュニケーションを促進する一助になれば幸いです。

平成20年3月
一同

コミュニケーション技術研修会 (Communication Skill Training) の目標

悪い知らせを伝える際のコミュニケーション・スキル (SHARE) を習得する

パート別目標

パート	目標
I. 講義	SHARE の内容を理解する
II. グループ・ワーク	
他己紹介	受講者間やロール・プレイに対する緊張感を緩和するとともにグループの凝集性を高める
ビデオ	SHARE の理解を深める
III. ロール・プレイ	SHARE を使えるようになる